

自分らしさが響きあう

保育実践の創造を

加藤 繁美

小学一年生がおかしい……

小学校低学年を担当する教師から、「最近の一年生は何かおかしい」という訴えを受けることがよくある。もちろん、小学校一年生のクラスに、最初から何も問題のない子たちが集まり、授業が難無く成立するとしたらその方が問題なのであって、子どもが落ち着

かないとか、なかなか授業に集中できないということそのものは、むしろ一年生の普通の姿だと考える方が自然なことなのである。

ところが多くの教師たちは、そのことを十分承知した上で、「それでもやっぱり何かおかしい」と訴えてくる。私自身、最初の頃はこうした問題を、教師の力量の問題と考えて対応することが多かったのだが、こ

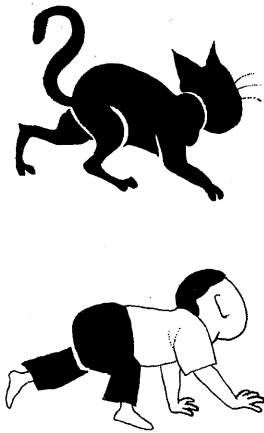
の五年くらいの中に、どうもこれは、単純に教師の個人的力量の問題として考えるだけでは片づかない何か、子どもたちの中に進行しつつあるのではないかと考えるようになってきた。

事実、私自身のこんな実感を裏打ちするかのよう
に、『日本経済新聞』（一九九七年十月八日）は
「ちょっとへんだぞ／小学一年生」という特集記事を
掲載し、さらに同種の問題を『日本教育新聞』（一九
九八年二月二十八日）も『育ち足りない』子どもた
ち」と題して紹介している。たとえばそこに登場して
くる東京・稲城市の「一年担任会」で出される子ども
たちの様子は、次のような感じなのだという。

あぜんとしたのは入学式当日だ。式場を退場する
時、ある男子と手をつなごうとしたら「何すんだ
よ」といきなりひじてつをくわされた。「ごめん
ね」といって肩をそっと抱くようにしました。人
とのかかわりが希薄だったんでしょね。その

時、この一年心してかからねぼと思いました」と
振り返る。「アスレチックのトンネルくぐりをし
てる子の上に砂をかける子」「水道の蛇口に手を
あてて友だちに水をかける子」「注意すると大泣
きする子」と、担任会では子どもたちの様子が
次々に出される。

教師に手をつながれて「何すんだよ」はないような
気もするが、報告されてる事例そのものは、それだけ



取り出せば別に目新しい問題とは言えないように思われる。これまでもそんな子どもならこの学校にもいたような気がするし、その現実から教育が発するんだと言われれば、それはたしかにそのとおりなのである。しかしながら教師たちは、そうした問題が生じたときに、これまでだったらトラブルをくぐって子どもたちは、何とか自分を立て直すことができたのだが、今はそれが極端に困難になっていると主張する。

たとえば、子どもたちが教室の中で座っていられないし、ちょっとしたことでも、パニックになりま す。何か課題を与えた時に、その課題ができないということでもパニックになる。一回パニックになると、しばらくはおさまらない。バカヤローだの、人殺しだの、いじめるなーだの、ありとあらゆる言葉を発して、しばらくはおさまらなくなり ます。

私が出会った子の例では、自分がパニックになり ますと、机をバーンと倒したり、物を投げたり、給食を投げたりで。パニックがおさまるまではしばらく見守るしかなくて、強くでると、なおずうっと止まらなくなってしまふ。

『教育』一九九八年十月

もっとも私としては、こうした事例をもってただちに「今の子どもたちは」と断定的な話をする気は毛頭ないし、子どもたちをすぐに問題児に仕立て上げ、それを分析することで子ども のことを理解した気持ちになる最近の風潮に与する気持ちもさらさらない。

しかしながらそうはいうものの、それではまるで二歳児のダダコネのような姿を見せるこの一年生たちの現実を、特別な事例として無視していればいかとうと、やはりそれも誤りなのだろうと思っ ている。実際、同様の問題はすでに幼児後期の段階で、かなり深刻な形で現れてきているし、またそうした問題が、乳

幼児期に形成されるべき人間の能力の歪みとして表面化していることは、おそらく間違いないことなのだから。

大人の要求に過剰適応気味に生きる子どもたち

この場合見落としてはならない点は、ここである。「人間の能力の歪み」の現実、何も先に登場してきた小学一年生のような形で表れる「荒れ」に限定されるわけではない点にある。いやむしろ、ある意味でこうした「荒れた」子どもたちの対極に位置する「いい子」たちの中に、実は形を変えた「心の荒れ」が広がっているというのである。そして、時としてこちらの方がむしろ、問題は深刻に展開していく場合があるというのである。

たとえば小児科医の三好邦雄さんは、『失速するよい子たち』（主婦の友社）という本の中で、「両親、祖父母に囲まれ、宝物のように育った」子どもや、母親をして「この子は幼稚園の時に天才でした」と語らせ

るような子どもたちが、学校に通えなくなって小児科の門をたたいてきた事例などを紹介しているが、こうした事例はいずれも、大人たちの要求に過剰に適応しようとした子どもたちが、背伸びをしすぎて自分を見失ってしまう点にあるのだという。そして問題が深刻なのは、こうした子どもたちの問題が、一種の心身症のような症状として表面化してくる点にあるのだが、実はこうした症状を訴えてくる子どもたちが、最近急速に増加しているのだという。

また同様の問題を『週刊朝日』（一九九八年三月二十日）は、「子どもの心身症が日本をほろぼす」と題して特集しているが、この中ではこうした心身症といわれる症状が最近では乳幼児にまで拡大しつつある現実を問題にし、その原因の一つが、いま乳幼児の間で広がっている「早期教育」なのだと分析している。たとえば、この点に関する慶応大学医学部小児科の松尾武さんに対するインタビュー記事の内容は、以下のとおりである。

「見るものすべてが揺れて見える」と訴えた四歳の女の子は週に五日、早期教育に通っていた。松尾教授の指導で全部休ませたところ、二週間で全快。元気に外であそぶようになったというが、松尾教授の悩みは深刻だ。

『なぜいけないんですか』『みんなに遅れるから』『本人は楽しんでやっている』と指導に従わない母親は多い。でも、子供は親が何を考えているかには敏感なんです。親がそうすれば喜ぶと知っているから、けなげに親に合せている。納得のいかない母親には二度と来院しない人もいます。こんな状況だと十年後には小児科外来患者の子供たちの半分が心身症や神経症ということも十分ありうる話なんです」。

小児科外来患者の半分が心身症や神経症になるとは、いささかオーバーな表現という感じがしないでも

ないが、それにしてもここに描かれた親子の姿は、たしかに今や日本中どこに行っても会うことのできる、ごく普通の親子の姿にはかならない。



人間に育つプロセスを、意図的に創出する実践を

一方に、「子どもの自主性に任せます」と言いながら、実は放置・放任に近い形の子育てをする親がいて、そしてもう一方には、「子どもの人生は私が決める」と言わんばかりに過剰干渉してくる親たちがいる。そして子どもたちは、そうした大人たちの価値観の中で、愛すべき「自分」というものを育てることができないまま、「自分づくり」の道程を右往左往しながらさまよわされている……。

おそらく問題は、こんな感じで進みつつあるのだろう。そしてこのようにみえてみると、子どものなかに生

じている諸々の問題は、実は大人自身の問題にほかならないという事実には、私たちは改めて気づかないわけにはいかなないのである。

教えるとは、ともに未来を語ること

学ぶとは、誠実を胸にきざむこと

かつてルイ・アラゴンが詩のなかで語った言葉だが、いま私たちは、目の前の子どもたちに対して、いったいどのような未来を語ろうとしているのだろうか。あるいは、人間として生きることの誠実さを、子どもたちの小さな胸にどのように刻み込もうとしているのだろうか。まさにそのことが問われているのだが、現実はどうも私たち大人の側が、子どもたちと共有すべき未来を見失い、彼らと語るべき誠実さを忘れた所で、子育てというたいせつな営みを展開しているように、私には思えてならないのである。

いや問題は、もっと深刻な形で展開しつつあると言

う方が正確かもしれない。つまり、「未来」とか「誠実さ」とかいったレベルの問題というよりむしろ、愛されることの心地好きそのものを実感できないまま「自分づくり」の道程を歩まされている子どもたちが増加しているというのが現実なのである。

たとえば先に紹介した稲城市の「一年担任会」の教師たちは、あの「荒れた」子どもとの間でいろいろと試行錯誤したあげく、最も効果をあげた対処法は、子どもを抱っこしたり、おんぶしたりすることだったという。

小学生になって、と思うだろうが、「みんなだっこしてあげるよ」と声を掛けると、子供たちがわっと押し寄せてくる。問題行動を起こした子どもと向かって注意をしても、ぶいっと横を向いてしまうが、おんぶしながら話す素直に応じてくれる。今の子供たちはスキンシップを伴った愛情を家庭で十分に受けていないのではないか。

(『日本経済新聞』一九九七年十月八日)

一人の教師はこのように語っている。もちろん問題を、子どもたちが「スキミング」を伴った愛情」を受けているか否かといった点のみに焦点化するわけにはいかない。むしろ問題は、親を含めて大人に愛されることの心地好さを実感できない子どもたちが、自我を主張する自分自身と、他者との関係をうまく調節できないまま、「いらだち」のようなものを増幅させながら生きさせられている点に存在していると考えべきなのだろう。

しかしながらそれにして子どもたちは、どうしてこれほどまでに、自分が「自分らしく」生きることには困難を感じなければいけないのだろうか。そして親たちは、どうしてこんなにも子育てという営みを、困難だと感じなければいけないのだろうか。

もちろん問題を単純に語ることはできないし、そこを脱出するための明確な処方箋が存在しているわけでもない。が、おそらくこの困難な現実から脱出する出口そのものは、意外とスッキリしたものなのだろうと

私は考えている。

つまり考えるべきは、子どもたちが人間に育っていく「当たり前」の道筋を、社会全体で保障していくこと以外にはないのである。言い換えればそれは、子どもたちが人間として「当たり前」に育っていく道筋を、家庭、地域、園・学校の中で意図的・組織的に保障していく実践をいねいに創りだし、それをつなげていくということにほかならないのだが、それは頭で考える以上に困難な仕事だといわざるをえない。

しかしながら同時に私たちは、この仕事がこの時代を生きる「希望」を紡ぎ出していくことも知っている。そしてそうだからこそ目の前の子どもたちとの間に、「自分らしさ」が響きあう実践を創り出していく努力を、今日もまた繰り返していくのである。

(山梨大学)